



女五首

文苑

佐々木信綱

老女

とつぎたる都の孫にあひがてら

上野とやらの花を眺めむ

工女

つかれたる工女のむれのゆきすきて

堀はた寒きさ夜あらし哉

漁婦

かつを船歸る渚の薄月夜

何れ我背の舟にかあるらん

伯母君

はつもの、峯のさわらび<sup>つと</sup>土産にして

伯母君ましぬ桃さける朝<sup>あした</sup>

少女

舞扇半ひらきては、えめる

おもわうつくし花の下かけ

吾孀の歌

た、き、生

あな、かみつよに

しこのしこくさ

やまとたけるの

みこはしづしづ

うすひのみねに

ひがしのかたを

いづのふなぢに

さかまくなみの

千ひろのそのの

なかきおもひに

ひめのみさはを

わがつまはやと

あらぶれし

うちきはめ

みなにます

かへるとに

たちたまひ

みたまひき」

かせわれて

うなばらや

もくずばら

かくろひし

おもひでに

のたまひき」

みことのよくに  
あづまのそらや  
ひがしをとなひて  
かのたちばなの  
そのみこゝろの  
みさほのはどこそ

つたはりて  
あづまぢと  
かぐはしき  
ひめぎみが  
あさからぬ  
おもひやれ

御代ほぎ

光あまねき 朝日かげ  
玉しく庭も 賤が家も  
おなじ恵に てらされて  
ともに樂しき 御代なれや

朝日照り添ふ 浦安の  
國も靜かに 治まりて  
外國人も 日の丸の  
旗を立てぞ 祝ふなり

つねを

若き人のわづらひ

小林 兩峰

若き人ありけり、その人の面白く、其の人の  
姿、楚々たりき、言清くすきいりて、高潮の  
すぎゆくが如し、其の人、想に沈みて悲みに  
かなしみて、なげきぬ、星の遠きみ空にくた  
る夕、かくわれにものかたりしかば、そのま  
ゝ、かきしるしぬ、

若き人の心の奥にかよふ氣はやはらかなり、そ  
の心をめぐりて流るゝ血は桃色にしてかぐはし、  
若き身にかよふ血まことにやはらかなれば、そ  
の熱さを限りなし、されば一たび其のやはさ、あ  
つさ若き身のそれに觸れば、身に秘めたる緒琴は  
ひびきをつたへて、野の白百合、かすけき曙のけ  
あひも、およぶべくもあらぬかし、